

現職教員大学院生が授業の一環として学部授業を担当する試み

特別支援教育コース 中野 広輔

1. 授業の概要

この授業は前学期に開講している2単位の授業で、対象は教育実践高度化専攻に在籍する2名の大学院生である。受講生は2名とも特別支援教育に携わる現職教員である。

2. 授業研究：

①授業研究内容

この授業は全15回であるが、大まかな構成は以下のとおりである。

1) 講義およびプレゼンテーション演習

まず総論的講義を行い基礎的知識の習得を図りながら、その後のプレゼンテーションのための準備期間とした。

内容
アイスブレイク、ガイダンス
講義
講義
発表①-1：知的障害について (ダウン症候群、脆弱X欠損症候群)
発表①-2：てんかんについて (脳波、ウエスト症候群)
発表②-1：自閉スペクトラム症の特徴 (薬物療法、TEACHプログラム)
発表②-2：異才教育(才能教育)について (2E教育、サヴァン症候群)
発表③-1：子どもの心臓疾患について (手術、学校生活管理指導票)
発表③-2：子どもの悪性腫瘍について (長期入院、院内学級)
発表の振り返り、授業実践の担当決定

プレゼンテーション授業では「知的障害」「自閉スペクトラム症」「病弱疾患」という領域において自分の発表テーマを定め、文献的に調べたことを発表することで後半の「学部生への授業」への布石とした。

2) 学部科目「インクルーシブ教育実践論」授業への準備と実践

前半の講義・プレゼンテーション学習を踏まえ、学部科目の準備と授業実践を行った。概要は以下である。

内容
授業準備(ゼミ的)
授業準備(ゼミ的)
授業準備(ゼミ的)
授業実践：食物アレルギーへの対応
授業実践：ADHDに関する薬物療法
授業実践：重度重複障害児の特徴

学部授業を担当するにあたっては、現職教員といえども自分で調べていきなり授業を担当するのは困難であると考え、ゼミを模した授業を3回行い、授業案を提案してもらいそれをブラッシュアップしていく作業を繰り返した。

授業実践では、まず中野から授業構成を説明し、ゲスト講師として大学院受講生が授業を行った。中野はファシリテーターとして全体を管理し、学部受講生からの質疑等を促した。

②大学院授業の一環で学部授業を担当した狙い

1) 教職大学院生としての授業実践経験

教職大学院授業と言えども、学内で行いうる授業実践は同一授業の受講生同士が行う模擬授業が

中心である。それ自体、非常に効果的な学習スタイルであるが、慣れたメンバーにより強い緊張感なく取り組めるものである。また、学外における実習ではあくまで授業の対象は在籍する子どもたちであり、内容は彼らが受けるべき授業に限られる。特別支援教育に関する専門領域の学習にあたり、学部生に講義を行うという方法は緊張感や責任感を高く持ちながら教員としての資質を高める効果が期待できる。

2) 学部授業受講生への学習効果

大学院受講生はあくまで自分たちの授業の一環として授業を実践を行っており、学部授業に対する責任を負っているわけではない。そこは責任教員である中野がゼミ的授業を繰り返しながら内容を最適化するプロセスを通じて質を保障している。実際に授業実践時に適宜補足説明等を行った。そもそもこのような案が可能だった大きな要因は、本大学院授業で学ぶべき内容と「インクルーシブ教育実践論」で取り上げるべきテーマが共通していたことである。学部受講生たちも教員を目指している学生が主体であり、教師の先輩が自分たちの学部授業まで担当したことは新鮮であり、効果的な刺激となっていた印象である。

④授業後に実施したアンケート

2名がそれぞれ授業実践を終了した後、この取り組みを行ったことに関するレポート（兼アンケート）を提出してもらった。以下はその要約である。なお、これを提出する前に、学部授業の受講生に、大学院生の授業を受けた感想を読んでもらった。

受講生 A :

○授業実践の感想

今回授業を担当したのは貴重な機会となった。自分自身も、まだまだ知らないことが多く、今後さらに知識を習得していきたい。

○学部生の感想の要約

人によりアレルギー疾患の特徴は様々であることがわかった。また、アナフィラキシーやエピペンについて初めて知り、練習キットを演習できたことがよい体験になった。

受講生 B :

○授業実践の感想

授業の準備の段階で、インターネット上の情報をうのみにすることの危険性を指摘されたことが大きな学びとなった。教師を目指している学生への授業体験が自分にも大きな刺激になった。

○学部生の感想の要約

今回の授業を受け、実際に障害が重い子どもを受け持つとはどういうことかを始めて具体的に理解できた。これをよい刺激に、将来の学校現場で自分にできることを実践したい。

3. 総合考察

今回は現職教員としての資質向上を図る立場の大学院生受講生が、授業で学ぶべき内容を学部生の授業で授業実践できるという点がユニークであった。展開としても、

- 1) 基礎事項の講義およびプレゼンテーション演習
- 2) 授業実践の準備としてのゼミ的授業
- 3) 実際の授業実践
- 4) 学生の感想レポートを活用した振り返り

というプロセスは新鮮であった。「先輩教員が教員志望の後輩に授業する」という機会は珍しく、相互により刺激になったことが双方へのアンケート・感想からも判明し、教育効果も高かったと推測した。しかし、一方では授業が成立する可能性に制限がある状況も示唆された。すなわち、この取り組みができた最大の要因は「担当教員（中野）が同一クールにたまたま大学院授業と学部授業で同一の学ぶべきテーマがあった」ということである。これは必ずしも発生するとは限らない状況であり、恒常的な方法足りえるかは疑問と言える。とはいえ、各大学教員が担当する授業はある程度その教員の専門分野であり、「この方法論がありうる」という視点で当該時期の担当授業を確認する価値はあると考えられる。

教員にとっても、必ずしも自分の研究室に所属するわけではない受講生に対してゼミ的な指導を行うことは新鮮な刺激になると同時に、もともと自分が担当する学部授業を別の角度から俯瞰し、あらためて質の保障も考慮するよい機会となった。相互に感想・アンケートを実施して「大学院受講生」「学部生」「教員」の三者がそれを活用する「3すくみの省察」が行えたことも有効であった。